

私本太平記

卷九



老川英治

私本 太平記

卷九

建武らくがき帖

私本太平記 卷九 建武らくがき帖

〔著者との申し合わせにより
検印を省略します〕

昭和三十六年四月二十日 初版	定価 二百六十円	著者 吉川 英治	発行者 高木 金之助	印刷所 凸版印刷株式会社	製本所 大日製本所	発行所 毎日新聞社	東京都千代田区有楽町一の一 大阪市北区堂島上二の三六 門司市清滝町一の九〇二 名古屋市中村区堀内町四の一
----------------	----------	----------	------------	--------------	-----------	-----------	---

目 次

天下多事 三

義貞上京す 三六

勝者の門 四〇

尊氏たかうじと成る 三三

鞭むちの宮 三五

ちよへい旋風 二八

今・道鏡 三八

夕顔晩歌 一五

男山 一七

毛抜き 二〇

初雪見参 二三

北山手入れ 二六

土の牢 三〇

私本太平記

卷九

建武らくがき帖

每日新聞朝刊連載
昭和三五・五・一八—三五・九・六

天下多事

いわば五月は革命月だった。誌すべき事が余りに多い。——で、鎌倉をしばらく措く。——そしてこゝはまだ天下混沌こんとんといつていゝ所だが、突々えきくと天の一方からは、理想の到達に誇った凱歌のあしおとが近づいて来つゝあった。——都門還幸の後醍醐りゅうがの竜駕であった。

路次の日誌によれば。

さきに伯耆ほうぎの船上山はうせんを立たれた帝の瑞興ようよ（こし）は日をかさねて、二十七日、播磨の書写山しよしゃさんまで御着ごちやく。

あくる二十八日は、法華山みゆきへ行幸され、あとは一路いそいで月のすえ三十日、兵庫の福厳寺ひようごんじにつき、こゝで中一日は御休息あったとある。

しかし、それはたゞ単なるお泊りだけのものではない。

新田義貞からの早打ち——鎌倉大捷の上奏文——をたずさえた急使、長井六郎、大和田小四郎のふたりは、福原（神戸）の道で鹵簿の列に会し、思わず供奉の前列へ走りよって、『これは東国の新田小太郎義貞より遣わされた急使の者です！一刻もはやく奏聞にとの主命により、いそぎのぼって参りました。——路傍ながら御侍者まで！』

と、大声で言つてぬかずき、先駆から後列の公卿たちまでを、びっくりさせた。

とりあえず、福厳寺に入り、庭上の二使から正式に新田の羽書（軍の急便）の捧呈をうけた。そして公卿はこれをすぐ、觀覽にいったのだった。

まもなく。御座のあたりから、御喜悅と感動に震うお声がもれ、それはすぐ供奉の全員にも狂喜の渦をよびおこした。せつな福厳寺の内外は、わきかえるような歓声また歓声だった。

『鎌倉は陥ちた！』

『高時も自害とあれば』

『いまは六波羅もなし、東国の府もほろび、全北条は、地から消えた』

『しかも、還幸のご途上に、この吉報がとゞくとは』

『去年の三月には、みかどの隠岐遠流を、人みな、こゝでお見送りして悲んだものだが』

口々の昂奮はやまず、どよめきはいつまで醒めなかった。——また後醍醐のお胸もこれに表現

されていたといえよう。こうも早く鎌倉が陥ちるとは、まだまだ予期されていなかったことである。配所の一年余、隠岐脱出の苦難、思い出はつきあげて、おん臉はふと熱かったに違いない。……すぐ三位ノ局廉子もこれを聞かぬやいなおそばへ来ていた。

また、同日。

赤松円心父子四人が、勢五百騎で、奉迎のお供にと、福嚴寺へ参向してきた。折しものことである。竜顔わけてうるわしく、

『かゝる日に会しえたのは、ひとえに汝らの忠戦の功に依る。いずれ恩賞は望みにまかすぞよ』と、朗々としたおことば。将士へも、賜酒があった。

この晩、たれにもまして、もて囃されたのは、新田の使者の二人だった。野營の庭では供奉の将士から酒攻めの果て、胴上げされんばかりな騒ぎ。これさえホ、笑ましくお聞きあるのか、御簾のあたりのお叱りもない。そして鶏鳴早くも、いよいよ都入りのおしたくに忙しかった。

還幸の途々は、伯耆いらい、こゝまでも、たいへんな列伍だった。

頭ノ大夫行房と、勘解由ノ次官光守は、衣冠すがたで、馬上。ほかの公卿官人はみな、騎馬戎衣（軍装）で供奉についた。

出雲の守護、塩谷判官高貞も、国元兵をつれて、前驅の役をつとめている。朝山太郎は五百騎

で後陣にしたがい、金持^{かなじ}大和守は、錦の旗を捧持し、また、伯耆守名和長年は、

帶劍の役

といつて、主上のすぐそばに騎馬を打たせ、

「途上、万一でもあらば」

と、警固のまなこをくばって行く。これは名誉第一の役目らしい。

雨師^{うし}、道ヲ清メ

風伯^{ふうはく}、塵ヲ払フ

と、古典の形容も過大ではなかった。

ゆらい沿道の行粧に、威儀や綺羅をたつとぶ風は、古い王朝はどうすぐ、時代がさがり、乱に乱をかさね、世間の臉が、権力のまばゆさを覚えてくるほど、それはものものしい故実^{こじつ}を積んで人心収攬^{しゅうらん}の演出を、諸民のなかに凝^こらしてみせた。

まして、今日はだ。

つい一年前には、囚人輿^{めしうとこし}で隠岐ノ島へ送られた道を、この還幸となった事。——この日、六月二日には、赤松円心の五百騎もお供に加わったから、その行列は、福厳寺の門を出るまでもずいぶん時間を要したであろう。大納言ノ局、三位ノ局廉子^{かぜこ}など、隠岐このかたの、妃^ひたちもお連れ

なのである。

廉子は、昨夜らい、

『こういう時にこそ、かえって一時のお疲れが、どっと出ぬでもありません。なるべく朝は朝涼あさすずのまに、お道をすゝめ、京もはやとて、おいそぎなく』

と、そのみでなく、こまかいご注意をすゝめていた。そのいそいそしさ、良人の暗れの口を見た糟糠そうこうの妻の風がある。

中一口の御逗留のまに、

『御衣ぎよいもこれでは。……お帝冠かんだいも、ま新しいのに』

と、お身まわりから、乗車のさしずまで、行房をつうじて、一切のきりもりしていた彼女は、

当然、自身の后車うしろくるまやら身粧いにも、細心な装いを忘れなかった。それだけを見れば、あたかも、

彼女自身の凱旋を、彼女がときめいているようだった。あるいは、こういう日の誇らしさに酔う

ことは、女人のほうが数倍かもしれない。なにせい、今朝の阿野廉子かどこが、軍兵環視の中を、

車御簾くるりょうのうちにかくれた姿には、もう烏簍しやうれの翳かげもなかった。

輿こしはすて、みかども、妃たちも、こゝからは牛車となられたわけである。——そして朝霧もま

だほの白いうち、兵庫をはなれて来たときだった。前駆の塩谷判官が、駒を返して来て、

『頭ノ殿、頭ノ殿』

と、行房へ告げていた。

『たゞいま、行く手の先に、河内の楠木多聞兵衛正成が、家の子郎党をつれ、お迎えにと、これへ馳せ参じてまいりました。——後陣に加えましょうか、そのまゝ、先を打たせて進ませましょうか』

すると、行房の答えも、その奏聞もまたず、み車のうちで、後醍醐のお声がした。

『なに。河内の正成がこれまで来たとか。……車を止めい。そして、まずは正成一人に、こゝへと申せ』

正成は、西の宮へ、今朝ついたばかりであった。「何は措いても……」と急遽、参向したのであろう。千早の籠城半年余の囲みが解け、死中に活をえたのも、つい二十日前のことではかない。だから曠れの凱旋の鹵簿をお迎えに——と、これへ来ても、正成はじめ、弟の正季、一族すべて、特別、身にかざる綺羅なよろい太刀や行粧などは持ち合せていなかった。鍔のボロを縫い、具足の破れをつくり、たゞ肌着を清めて来ただけの姿なのだ。——古典によれば——正成七千騎ニテ参向、ソノ勢、殊ニ由々シクソ見エタリ——とあるが、彼自身も以下の兵も、みなはじめな身なりで、しかもその大半が、まだ飢餓線上からよみがえったばかりの顔いろの悪い者やら、

負傷者であつたはずである。

「お召ぞ」

との伝令で、彼は歩いて、一人、み車立ての方へみちびかれて行つたが、氣がつく者があれば、正成自身もすこし跛行^{びつこ}をひき、その頬肉のソゲも、他の諸大将の比でない寒れ方^{やれ}と思われたにちがいない。

だが、衆目はそう取らず、かえつてべつな思いをしたかもしれないのだ。「……これが百七十余日、敵数万の包囲の中で、千早の孤塁^{こるい}をさゝえて来たあの大将か？」と、その風采や太刀粧いの見すばらしさに、ふと輕侮に似た案外な容子を、露骨にたゞよわせた人々も無くはなかった。

『……おん前に』

正成は言つて、み車の轅^{なぐさ}の下に坐り、地へつけた両肱^{りょうひじ}と平行に、かしらを低く垂れていた。

『楠木か』

と、後醍醐は、み車のすだれを掲^かげ、乗り出すように下を見て。

『……やれ兵衛、よく見えたの。思えばまた、よくも再会しえたものよな』

『はっ』

『笠置^{かさざ}いらいか』

『は』

『そうだったな』

『御意にござりまする』

『茫として、遠いむかしのようだし、つい昨日のようでもある』

『……………』

正成は、ご感激にこたえて、何か言上せねばと思い、また、およろこびを述べるべきだとも知っていたが、何も口に出なかった。河内の片すみにある一土豪に過ぎぬ身が、伝奏も経ず、じきじきなお答えなどはどうだろうか。そんなためらいも交じているまに、後醍醐のほうは、溢れる感激のまゝに嘔慮余すなく吐いて。

『兵衛。そのほうの終始変らない忠誠は忘れはおかぬぞ。そのほう無くば、今日の還幸は見ることもできなかったろう。回天の業も夢に終っていたかもしれぬ』

『……………』

正成の顔が、地を濡らしているふうだった。その破れ烏帽子が、ふるえて見えた。

後醍醐は、凝視のまゝ、こゝで彼へも他の武將並みに、よく仰っしゃることを、仰っしゃった。『いずれ恩賞は望みにまかすぞ。沙汰を待て』と。

次に。供奉の公卿へむかって、

『兵衛の勢は、列の先に立たせ、都入りの前陣を勤めさすがい』

とも直命された。

正成は、面目をほどこした。恩賞その事よりも、彼には、その直命が、ありがたかった。千早百日の苦闘も今一瞬にむくわれた思いがしていた。

西の宮から先、鹵簿は、正成以下の畿内の兵数千が露ばらいして進み、六月五日の夕、東寺に着いた。

こゝでお待ちしていた洛内軍には、千種ノ中将忠顕があり、足利高氏、弟直義も見えている。

中でも一トきわ目についたのは、佐々木道誉の黄母衣組の美々しさだった。彼も急遽、近江からこれに会して、

「足利と共に力を協せ、六波羅攻略の大功を仕遂げし者」

と称え、また高氏もそれを称揚して、共々、曠れの御車迎えに来ていたのだった。

『…あの、道誉か』

と、後醍醐のご記憶にも、彼の特有な人間臭が、忘れえぬものとしておありらしく、謁見の庭、夜の賜酒にも、道誉は加えられていた。